



北海道大学医師会
北海道大学大学院医学研究院 産婦人科学教室

渡 利 英 道

私には19歳の娘がいる。2～3歳の頃から「ディズニーランド」を愛し、小学生の中学年からはアイドルグループの「嵐」をこよなく愛している。

「ディズニーランド」については娘が保育園や小学校の頃は年に2回は必ず行ってはキャラクターと写真を撮り、ファストパスチケットを駆使して効率的に乗り物に乗ったものだ。特に小学校高学年になるとビッグサンダーマウンテンとスプラッシュマウンテンがお気に入りとなった。一度、娘の7歳下の息子に「怖くないから大丈夫」と言い聞かせて無理やり乗せて以来一切乗らなくなったので、家内が息子のお守りで、娘と乗るのはもっぱら私の役目となっていた。ちょうど小学校の卒業直後の3月にオランダで学会があった時には、演題を提出しつつ奮発して家族4人で「ディズニーワールド」を訪れたが、これは家族にとってかけがいのない思い出の一つとなっている。その時のことで一番思い出すのは、朝一番でスプラッシュマウンテンに乗った時のことである。アメリカ人は開園早々から並んで入場するという考えがないようで、待ち時間なしで娘と二人でスプラッシュマウンテンに乗車できた。戻ってきて降車しようと思っていたその時、私たちの前に座っているアメリカ人が降車せずにそのまま行かせろと係員に主張しだした。確かに待っている人たちがいなかったので迷惑はかからないと思ったが、日本ではこのようなことは基本許されないことだと思った。ところが、係員はゴーサインを出してそのまま2回目に突入したのである。娘とともに「ラッキー！」と喜んで2回目を楽しんだのだが、この経験を通じてアメリカ人の合理的で柔軟性の高い気質は素敵だなあと感じたものである。日本人の几帳面さももちろん好ましいが、時に融通の利かないことにつながることを考えると、マニュアル通りではない臨機応変な対応というのは日本人が見習っている面ではないかとも思う。最近では娘が息子に「今度一緒にスプラッシュマウンテン乗ろうね」などと話をしているのを耳にして少し寂しい気もしたが、50歳代も半ばを迎えてそろそろ親父には体力的に厳しかろうと考えて気遣ってくれている節がある。娘も成長したものである。

「嵐」のメンバーの中の娘の一番のお気に入りは、松潤である。確かに正統派のイケメンであるが、娘

曰く、「松潤が一番だけど、グループとしての「嵐」が好き」なんだそうである。私は娘のおかげで「嵐」の曲を自家用車のディスクに入れて聞かされたことから、カラオケで歌えるまでに成長し、おかげで病棟の若い看護師さん方とも違和感なくコミュニケーションをとることができ、大変ありがたいと思っている。さらに娘のおかげで札幌ドームのコンサートにも参戦する機会があったが、確かにファンに対する感謝の気持ちに溢れており、チームワークが良くお互いの役割分担をよく理解しており、お互いを信頼し尊重しあっていることが伝わってくる素晴らしいグループであると直に感じる事ができた。これは教室運営にもそのまま当てはまることではないかと思っている。つまり、全員が「エースで4番」である必要はなく、むしろさまざまな興味の方向を持っている人たちの集団であること、それぞれの個性や能力をお互いに認めあって尊重しあえることが、その組織が強い集団になっていくために必要不可欠であると考えている。

その「嵐」が2020年を節目に活動休止するとのことで大変寂しい限りであるが、私を含めた北大産婦人科の教員が「嵐」のように周囲に対する気配りができる素敵な集団であり続けたいものだと、教室運営を任されて1年を経過してつくづく思う今日この頃である。

